

ヴェトナム戦争に対する

ラッセルの平和スピーチ

正田義彰

バートランド・ラッセルは、去る五月十八日、九十五歳の誕生日を迎えたが、同月上旬、スウェーデンの首都ストックホルムにおいて、「ヴェトナム戦争犯罪国際法廷」(「ラッセル法廷」)が開かれた。これは昨年の春ラッセルによって発議され、『ラッセル平和財団』(一九六三年設立)を中心として準備されてきたもので、途中アメリカ政府の圧力により会場(予定ではパリ)の変更などがあり、予定より二ヶ月遅れてようやく実現したものである。今回の第一次審理には、ラッセルの呼びかけに応じたサルトル、ボヴォワールなど約二十名の著名知識人が世界各地から参加し、四次にわたる現地調査団によって収集された豊富な資料と証言にもとづいて、ヴェトナムにおけるアメリカの軍事行動について徹底的な究明を試みた。今回は「この戦争が侵略行為であるか」、「純然たる民間施設に対する爆撃がおこなわれたか」の二点が審理され、最終審理は今秋

(おそらく再びストックホルムで)開催される予定である。

わが国では現在までのところ、この法廷はほとんど一般の関心をひくに至っていない。大多数の人は法廷の存在さへ知らないし、それを知る少数の人々の間でも、法廷の意義については否定的な見方が普通である。たとえば、知識人によるこの種の運動は元来大衆から游離したものであり、要するにこれらの自己満足のためのものであるに過ぎない、という見方がある。また直接には、この法廷がいわゆる法的権威をもたない一種の模擬裁判であり、しかも被告の出廷しない裁判であるところから、たとえそこでどのような審理がおこなわれ結論が出されようと、それによって世界の権力機構が影響されるとは期待できない、という見方もある。しかしこのような見方は、無関心の原因であるというよりも、むしろその結果であり、その前提には、従来の抗議運動がことごとく無効であったことから

る深い失望と無力感があると言えよう。この法廷は、まさにそのような失望や無力感に陥っている人々を鼓舞し、問題解決の窮極の鍵である「真実に直面し、そのために戦う勇氣」を与えることを目的としている。法廷議長ウラジミール・デディエ(ユーゴの法学者・作家)は開廷にあたって次のように声明した。

「……この法廷は私人あるいは公人にたいして、なんらかの判決を下す意図や権限を持つ国際法廷ではありません。法廷は、ヴェトナムでおこなわれたと思われる戦争犯罪の証拠を科学的な、公平な態度で深く検討し、世界の世論に伝えようとしているのであり、その唯一の目的は、国籍や政治的信条の相異にとらわれることなく、すべての国民の立場を尊重して、公正に真実を見出すことにあります。この法廷の唯一の力は真実の持つ力であり、法廷はただ人間の良心にたいしてのみ訴えるものであります。……」

この法廷に関するこれまでに入手できた記録を読んで、この法廷に対する一般の無関心や否定的評価の最大の原因は、ほとんど無視に近い態度でそれを取扱ったわが国の新聞の姿勢にある、と私は考える。(ヴェトナム問題全般に対する新聞の姿勢については後に述べる。)そしてこの法廷は、次に述べる二つの特質によって、私たちひとりひとりの良心に深く訴え、問題に対する全く新たな見方を与え

てくれるものと私は確信する。

そのひとつは、法廷に参加した人々が、数人のアメリカ人をふくめて、あくまで世界の一市民の立場に立ち、いかなる国、いかなる政府の指令も権益の委託も受けていないという事実にある。これによってこの法廷は、従来の意味での法的効力という点ではまったく無力であるが、他方では、「われわれは無力です。これこそわれわれの独立の保障なのです。」とサルトル(法廷裁判長)の言うように、過去の戦犯法廷の持ち得なかつた純粋な自主性と普遍性——真実を追求する者の持つべき根本的条件——を確保している。(これは、同じく五月に京都で開かれた世界新聞首脳会議の参加者たちが、結局は自国の権益を代弁するにとどまったのにくらべて、いちじるしく対照的である。)

しかし、もうひとつの遙かに重大な特質は、この法廷が、アメリカ自身を主要な当事者として遂行された「ニュールンベルク裁判」の法理に依拠していることである。この法廷の持つ厳しい論理性と倫理性が、そこから生じる。ニュールンベルクにおいて、アメリカ代表のジャクソン主席検事は「ある種の行為や条約の侵犯が犯罪であるならば、合衆国によってなされようとドイツによってなされようと、それは犯罪である。われわれは、犯罪行為に関して、われわれ自身に対して発動されることを欲しないようなルールを、他に対して規定することは潔しとしない。」と

明言している。また、かれもキーン(極東裁判首席検事)も、戦犯裁判の眞の原告は「文明」である、それを破壊する恐れのあるすべての暴力を終熄させるのが戦犯裁判の目的である、と主張している。

したがって、ヴェトナムにおけるアメリカの軍事行動が同じ法理に照らして戦争犯罪であると論証され、それが世界の世論となった場合、アメリカ政府は自己を正当化することが極めて困難な立場におかれることになる。かれらは、国際社会におけるアメリカの役割についてかれらの抱くあの独善的な使命感や、それにもとづくかれらの世界政策を、あらゆる美辞麗句(それはしばしば狂信者の雄弁である)をもって強調し続けるであろう。しかしそれは、これらの正当性を証明することにはならない。なぜなら、「ラッセル法廷」が告発しているのは、かれらの主義や主張ではなく、それらの根底にある「目的は手段を正当化する」という野蛮な信条であり、巨大な軍勢力を擁する権力機構が臆面もなく犯し続けている大規模な殺戮、すなわち「文明」へのあからさまな背信行為であるからだ。ジョンソン大統領は、六五年四月七日、ジョンズ・ホプキンズ大学での講演で次のように語った。

「われわれは、決して敗北しない。われわれは、決して疲れ果てたりはしない。われわれは、公然であろうと、無意味な協定にかこつけてであろうと、決して引下りはしない。」

われわれは、空襲だけでは目的のすべてを達成できないことを知っている。しかし空襲は、平和への最も確実な道への必要な一部であるというのが、われわれの最善の、祈りをこめた判断である。」

いわゆる「北爆」が開始されてちょうど二ヶ月後のこの言葉は、ジョンソン政府の好戦的性格を赤裸々に示している。かれらの祈りをこめた判断が、戦況によつては核兵器の使用を決定する恐れは十分にある。事実、広島型の原爆はもはや禁止の対象にならない通常兵器である、とかれらは再三ほのめかしている。そして、核戦争がただちに人類の絶滅を意味する今日では、それを誘発する可能性のある戦争という手段に紛争の解決を求めること自体が、まさしく「犯罪」であると言わねばならない。しかもかれらは、歴代政府とかれら自身が調印・批准した各種の国際協定を無視し、かれらの行為が違法であることを承知の上で、この戦争を、言いかえれば犯罪を、続けているのだ。同じく北爆開始直後の六五年二月、サイゴン駐在アメリカ大使であったキャボット・ロツジは、会見記者の「ヴェトナムでのアメリカの行為は、国際法から見ても、どのような根拠で正当化されるか」という問いに答えて、「私の意見では、事態の合法的側面はなんの意味もない。」と断言した。アイゼンハワーとダレスに始まる危険な「瀬戸際政策」は、ジョンソンとラスクにおいてその極限に達し、ウ・タント国

連事務総長の警告する第三次世界大戦の勃発は、今や悲観論者の悪夢ではないと言わねばならない。

一方ではこのように合法性を無視して大規模な破壊行為を続けながら、他方では「正義」と「自由」の擁護者であると自らを誇る——この明白な自家撞着をますます深めつつ、アメリカ政府があくまでヴェトナムの戦争を押し進め拡大しようとするのは何故であるか。そこに展開される途方もない残虐行為に、アメリカ国民だけでなく、いわゆる自由主義世界のすべての国民が、しだいに麻痺させられ馴致させられてゆくのは何故であるか。これらの問いに答え、「ラッセル法廷」の意義を明らかにするものとして、ここに「アメリカ人の良心に」と題するラッセルのスピーチを紹介する。

「自由と社会正義に関心を抱く一個人として、私はアメリカの市民諸君に訴えます。

諸君の多くは、諸君の国はこの自由と正義を理想としてそれに奉仕してきたのだ、とお考えでしょう。事実、合衆国は革命の伝統を持ち、その伝統は、その起源において、人間の自由と社会的平等への戦いに忠実でありました。今日合衆国を支配する少数の人間によって傷けられているのは、まさにこの伝統なのであります。

諸君の多くは、世界の全ての地域における強大な経済的

占有によって権力を得ている資本家たちが、諸君の国をどれほど支配しているかを十分にご存じないかも知れません。世界人口の六パーセントを占めるに過ぎない合衆国が、今日では世界の天然資源の六〇パーセント以上を支配しており、地球の広大な地域の鉱物その他が、ほんの一握りの人間たちの所有となっているのです。諸君の指導者がおこなってきた搾取を時に暴露する、かれら自身の言葉をよく考えてください。ニューヨーク・タイムズ、一九五〇年二月十二日号には、こうあります。

『インドシナは大きな賭けに値する獲物だ。北部には、輸出可能な錫、タングステン、マンガン、石炭、材木、米がある。ゴム、茶、胡椒、皮革もある。第二次大戦前さえ、インドシナは年におよそ三億ドルの配当金をもたらしている。』

一年後、合衆国務省の某顧問は次のように言っています。

『われわれはまだ東南アジアの資源のごく一部を開発^{エクスプロイット}しているに過ぎない。にもかかわらず、東南アジアは世界の生ゴムの九〇パーセント、錫の六〇パーセント、やし油の六〇パーセントを供給した。そこには相当量の砂糖、茶、コーヒー、タバコ、シサル麻、果物、香料、天然樹脂、石油、鉄、およびボーキサイトがある。』

また、一九五三年、フランス人がアメリカを後楯として

まだヴェトナムで戦っていたころ、アイゼンハワー大統領はこう声明しました。

『われわれがインドシナを失ったと仮定してみよう。そうなれば、われわれにとって非常に貴重な錫とタングステンは来なくなるだろう。恐ろしいことが起る——インドシナ地方と東南アジアの富からわれわれの欲する物を得られなくなる——これを防ぐ最も安上りな方法をわれわれは求めているのだ。』

これで明らかのように、ヴェトナムの戦争は、東欧でドイツ人がおこなった戦争と同じ性質のものなのです。それは、この地域の富に対するアメリカの資本家の継続的支配を守るために計画された戦争であります。軍備に費やされる法外な金額が、武器を要求する将官たちが取締役会に席を連ねている産業に与えられていることを考えれば、軍部と大産業がかれらの利益のために結託していることが分ります。

事実、ヴェトナム人民の抵抗は、一八世紀に植民地アメリカの経済的、政治的生活を支配していたイギリス人に対する、アメリカ人の革命的抵抗とまさしく同じものなのです。ヴェトナム人民の抵抗は、ナチの占領に対するフランスのマキ、ユーゴスラヴィアのバルチザン、ノルウェーおよびデンマークのゲリラの抵抗と変わりません。だからこそ、微力な農業民族が、地上最強の工業国の大軍を食止め

ることができるのです。

合衆国政府がヴェトナムの人々に何をしてきたかを、どうか考えてください。諸君は、有毒化学薬品と毒ガスの使用、ゼリー・ガソリンと黄燐弾による全国土の集中爆撃を、心の底から正しいと言えますか。これについてアメリカの新聞は嘘をならべていますが、このガスと化学薬品の性質に関するありのままの証拠は圧倒的なものであります。それは有毒かつ致命的なものです。黄燐ナパーム弾は、犠牲者が泡立つ肉塊に変わるまで燃え続けるのです。合衆国は「レイジー・ドッグ」のような兵器も用いておりますが、これは剃刀の刃のように鋭い一万个の鉄片を内蔵する爆弾です。この鋭い鉄の矢は、この凶悪な兵器を絶えず浴びせられる村人たちを、ずたずたに切り刻むのです。きわめて人口密度の高い北ヴェトナムの一地方に、十三ヶ月間に一億個もの鋭い鉄片が降ったのであります。

この恐ろしい現実をさらに明らかにするのは、一九五四年から一九六〇年にかけてのジエムの治下におけるヴェトナム人の死者数が、ヴェトナムのパルチザンがアメリカの占領に対して武力抵抗を始めた一九六〇年以後の死者数を上廻ることです。新聞が「ヴェトコン」と呼んでいるものは、実際は、ヨーロッパの民衆戦線と同じく、カトリック教徒から共産主義者に至る全ての政治的見解を含む広汎な同盟なのです。民族解放戦線は国民のこの上なく熱烈な支

持を受けており、これに気付かないのは故意に眼をつむる人々だけでありませぬ。諸君は、八〇〇万のヴェトナム人民が、有刺鉄線と武装した歩哨に囲まれた収容所で、強制労働の条件下におかれていることをご存じでしょうか、これが合衆国政府の命令でおこなわれ、この収容所では拷問と虐殺が日常茶飯事だということをご存じでしょうか。ヴェトナムで五年間使われてきた毒ガスと化学薬品が、人を盲目にし、麻痺させ、窒息させ、痙攣させ、ついには悶死させることを、諸君はご存じなのでしょうか。もし敵が合衆国を爆撃し、十二年間も占領したとしたら、それが何を意味するかを想像してみて下さい。外国軍がニューヨーク、シカゴ、ロス・アンゼルス、セント・ルイス、サン・フランシスコ、そしてマイアミを、ゼリー・ガンリン、黄燐弾、レイジー・ドッグで集中爆撃したら、諸君はどんな気持ちでするでしょうか。もし占領軍が、侵入する全ての町や村で、毒ガスと毒薬を用いたら、諸君はどうしますか。アメリカ国民がこのように野蛮な侵略者を歓迎すると考えることが果してできるではありませんか。実際、世界中の人々が、アメリカ政府を支配する者たちを、自己の経済的利益のためには、このあからさまな搾取と侵略に無鉄砲にも反抗するいかなる国民をも皆殺しにして顧みない、残忍な暴漢だと考えるようになっているのであります。

フランスの対ヴェトナム戦費の全てを負担した末、合衆

国が対ヴェトナム戦に乗り出したとき、合衆国防省は一、六〇〇億ドルの物財を所有しておりました。またそれは、合衆国内に三、二〇〇万エーカー、諸外国にさらに数百万エーカーの用地を所有する世界最大の組織であります。今では、国費の四分の三が現在の諸戦争と将来の戦争準備に費やされております。巨億のドルが合衆国軍部の思うままになり、アメリカ人の生活のあらゆる面に影響する経済力をペンタゴンに与えているのであります。合衆国の軍事資産は、U・S・スチール、メトロポリタン生命保険、アメリカ電話電信、ゼネラル・モーターズおよびスタンダード・オイルの資産を合わせた三倍に当ります。これらの世界的大企業で働く人数の三倍の人数が国防省で働いています。巨額の軍事契約がペンタゴンによって用意され、大企業によって履行され、一九六〇年には、二一〇億ドルが軍需品に費やされました。この巨大な額のうちで、七五億ドルが一〇社に分配され、そのうち五社は各々約一〇億ドルを受取りました。注意していただきたいのは、これらの会社の執行部門には、二六一人の陸海軍将官を含む一、四〇〇人の軍人がいることでもあります。ゼネラル・ダイナミックスの従業員名簿には、一八七人の士官、二七人の陸海軍将官および前陸軍長官の名があります。これが合衆国の支配階級であり、名目的な公職に誰が選挙されようと、あくまで権力を握っているのはこの階級なのです。代

代の大統領は、この全能の階級の利益に奉仕することを義務と考えているのであります。国民がかれらを真に支配している者たちを罷免できないため、アメリカのデモクラシーは生命と意味を失っているのであります。

権力のこのような集中のために、ペンタゴンと大企業は、ひたすらに軍備競争を続ける必要があります。中小の企業と軍需業者に与えられる下請け契約は、アメリカのあらゆる都市に関係し、数百万の国民の仕事に影響しております。四〇〇万人が国防省のために働き、そこで支払われる一二億ドルの給料は、合衆国自動車産業のその二倍に当ります。さらに四〇〇万人が直接に兵器産業で働き、多くの都市では、軍事生産が全製造業の八〇パーセントにも達しています。合衆国の国費の五〇パーセント以上が軍事費に注ぎ込まれております。この巨大な軍事機構は、三、〇〇〇を越える軍事基地を世界に張り廻らしておりますが、その目的はただ、先に引用したアイゼンハワー大統領、國務省顧問およびニューヨーク・タイムズの声明に明らかかなあの「帝国」を守ることに他なりません。ヴェトナムからドミニカ共和国に、中東からコンゴにいたるまで、軍需産業および軍部そのものと結託した少数の大企業の経済的利益が、アメリカ人の生活の方向を決定するのであります。まさにそれらの企業の命令によって、合衆国は飢えた無力な人々を侵略し圧迫しているのであります。

しかし、合衆国の莫大な富にもかかわらず、世界人口の僅か六パーセントを以て世界の資源の約三分の二を握っているにもかかわらず、世界の石油、コバルト、タングステン、鉄鉱、ゴムその他の重要資源を支配しているにもかかわらず、世界の諸民族の集団的飢餓の犠牲においてアメリカの少数の企業が巨億の利益を得ているにもかかわらず——これら全てにもかかわらず、六、六〇〇万のアメリカ人は貧しい生活を送り、アメリカの諸都市はスラム街に覆われております。課税の重荷と、植民地での侵略戦争の戦闘を引受けるのは貧しい人々なのであります。諸君の周囲に日々起っている出来事の関係に頭を働かせ、合衆国の支配権を握りその社会生活を「世界帝国」の醜悪な兵器廠に墮落させた制度をはっきり見極めてください。この巨大な軍事機構、大規模な生産合同、およびそれらの持つ情報機関は、三大陸全ての人々によって、かれらの生活の最大の敵である、かれらの不幸と飢餓の原因である、と見なされております。アメリカの軍事力に依存する政府を検討すれば、金持と地主と大資本家を擁護する制度が必ずそこに見出されます。ブラジル、ペルー、ヴェネズエラ、タイ、南朝鮮、日本——世界中どこを見てもそうなのであります。

この結果、ヴェトナムの人々の偉大な歴史的蹶起のような国民的革命を弾圧するために、合衆国は、日本が東南ア

ジアで、ナチスが東ヨーロッパで振舞ったように振舞うことを余儀なくされているのです。先に言及した、南ヴェトナムの地方民のほぼ六〇パーセントを閉ち込めている収容所は、拷問と殺戮と集団埋葬の場であります。毒ガスや化学薬品やゼリー・ガソリンのような特殊な実験兵器は、第二次大戦でナチスの用いた何物にも劣らぬ残酷無比なものであります。

たしかに、ナチスはユダヤ人を組織的に撲滅しましたが、合衆国はヴェトナムで、まだそれに比すべきことをおこなってはおりません。しかし、ユダヤ人撲滅を例外として、ドイツ人が東ヨーロッパでやったあらゆることが、さらに大規模に、さらに恐るべき完璧な効率をもって、ヴェトナムでアメリカ人の手によって繰返されているのであります。

アメリカの大統領たちが署名し、アメリカ議会が批准した神聖な国際協定を犯して、現在のジョンソン政府は戦争犯罪——人道に対する犯罪と平和に対する犯罪——を犯したのです。このような犯罪を犯したのは、ジョンソン政府が、合衆国産業の支配者たちとその軍事力による被支配民族に対する経済的搾取ならびに軍事的支配を保持するために存在するからであります。米国中央情報局(CIA)は、合衆国の全外交活動の十五倍の予算を持ち、国家の首脳の暗殺と独立政府に対する陰謀に没頭しております。この邪

悪な活動は、アメリカの経済的・政治的支配に首を締められている状態から逃れようとしている諸国民の指導組織の破壊を目的としています。合衆国のミリタリズムは、アメリカ国民そのものをこの一世代のうちに貧困に陥れた貧欲な資本主義とまさに不可分の関係にあります。この根本的動機こそ、ヴェトナムにおいて、大規模な、野蛮な、残虐な犯罪を招いたのであります。

私は世界各地の知識人と、権威に屈しない卓越した人々に、ヴェトナムにおける合衆国の犯罪に関して証言を聴く「国際戦争犯罪法廷」への参加を要請しました。諸君は、ドイツ人がかれらの政府の犯罪を黙視し容認した場合、私たちがかれらを有罪だと考えたことを記憶しているでありません。ドイツ人がガス室や収容所、拷問や生体実験のことは知っていたが、それをやめさせることはできなかった、と申し立てても、それが十分な弁明になると考えた者はありませんでした。私は人間対人間の立場から諸君に訴えます。諸君の人間性と諸君の自尊心を思い起して下さい。ヴェトナム人民に対する戦争は野蛮なものであります。それは征服のための侵略戦争であります。アメリカの独立戦争のとき、誰もアメリカ人に戦いの目的を教えたり、かれらの意志に反して徴兵する必要はありませんでした。外国軍に対するアメリカの革命的な戦いにおいて、たとえ身に襁褓をまとい、占領軍が当時世界最強のものであ

るうと、アメリカ人は野で森で戦いました。たとえ食もなく貧しかろうと、かれらの一軒一軒が占領軍と戦ったのであります。その解放戦争において、アメリカの革命兵士たちはテロリストと呼ばれました。植民地当局はかれらを反

逆者と呼び、暴漢と呼びました。アメリカの国民的英雄たちは、ネイサン・ヘイルやパトリック・ヘンリーの言葉をもつて、それに答えたのであります。「我に自由を与えよ。しからずんば死を与えよ」という気持がかれらを鼓舞したのであり、まさにそれと同じ気持が、合衆国の侵略と占領に対するヴェトナムの人々の抵抗を鼓舞しているのであります。ヴェトナムのネイサン・ヘイルやパトリック・ヘンリーたちは、合衆国の軍隊ではありません。一七七六年のアメリカの人々を鼓舞した英雄的性情、愛国心、そして自由と正義に対するあの深い信念を示しているのは、今日では、民族解放戦線の革命的指導のもとに戦っているヴェトナムの人々なのであります。そして、ヴェトナムの人々だけでなく合衆国国民そのものを搾取している者たちによつて、アメリカ人が砲弾の餌食として使われる運命にあるのです。ヴェトナムの人々を殺し、村々を攻撃し、都市を占領し、毒ガスと化学剤を使い、学校や病院を爆撃しているのはアメリカ人なのです。しかもこれはすべてアメリカ資本主義の利益を守るためなのであります。兵士を徴集する者は、自分自身の利益のために軍事契約に署名する者

と同一人物なのであります。それは、盗んだ財産を守るために、アメリカの兵士たちを用心棒としてヴェトナムに送る者とまさに同一人物なのであります。

したがって、自由とデモクラシーを守る真の戦いは合衆国そのものの中にあり、それはアメリカ社会を侵害する者たちとの戦いであり、もし合衆国が侵略され、合衆国政府と軍隊がヴェトナム人民に加えたような残酷な拷問を受けたなら、アメリカ国民はヴェトナム人と同じように抵抗するであろうと私は信じます。アメリカ国内の抗議運動（それは世界中の人々を鼓舞しました）は、アメリカ人が個人の自由と社会正義を重んずることを表明する唯一の真のスポークスマンであります。自由を守る戦いの最前線はワシントンにあります。それは、合衆国とその市民を墮落させた戦争犯罪人——ジョンソン、ラスク、マクナマラー——との戦いであり、実にかれらは、合衆国をその国民から盗み取り、その偉大な国の名を世界中の人々の鼻つまみものにしたのであります。これは耳に痛い真実であり、アメリカ人の日々の生活にますます取返しのできない影響を与えている真実であります。これに眼をそむけることは許されません。戦争犯罪は行われていない、毒ガスや化学剤は存在しない、拷問やナパームは用いられなかった、ヴェトナム人はアメリカ軍とアメリカの爆弾で殺されはしなかった——このように申し立てることは不可能であります。

この悪を検討し、それに反対する勇氣なくしては、人間の尊厳はありません。アメリカ国民自身が、かれらの名をかたつて偉大な国民の名を汚しているあの野蛮な者たちから解放されなければ、アメリカの危機は解決されません。しかし、アメリカ国民は目覚めつつあり、ヴェトナム人民が示したあの感嘆すべき決意と勇氣を示しつつあります。ハーレム、ウォツ、アメリカ南部における黒人の闘争、アメリカの学生の抵抗運動、アメリカ国民全般が示すこの戦争に対する次第に強い嫌悪は、残忍な者たちがアメリカ国民を欺き辱め得る時代は終りに近付いている、という希望を全人類に与えてくれるものであります。合衆国の支配者たちが、かれらの醜い顔とかれの行動の真相を国民に知られまいと、あらゆる宣伝の策を弄していることを十分に承知の上で、私はこの訴えをしております。アブラハム・リンカーンは「国民は、ひとたび目覚めれば、二度と欺かれはしない」と申しております。ヴェトナムで何がおこなわれたかを、自分自身の経験あるいは近親者の経験から知っている全てのアメリカ人が、今こそ進み出るべき時であります。真実を語り、世界中にいる諸君の兄弟と手をつないでください。アメリカを、殺人道具生産から、戦争犯罪から、搾取から、被支配民族の憎悪から解放することを目的として戦ってください。これらの民族は、合衆国の一般国民がかれらの苦境を理解し、合衆国をして再び個人の自由

と社会正義の砦たらしめる抵抗運動をもってかれらの闘争に応えることを期待しているのであります。「国際戦争犯罪法廷」そのものも、我々と共通の目的に結ばれたアメリカの人々の良心に対する訴えなのであります。

「戦犯法廷」は現在緊急準備中であります。私は、アメリカ、アジア、ラテン・アメリカおよび合衆国の卓越した法律家、文学者ならびに社会問題研究家に呼びかけております。この戦争のヴェトナム人犠牲者も証言します。使用された化学剤とその性質と効果に関する完全な科学的データが記録され、目撃者は見たままを報告し、法廷の入手した証拠物件を調査するために科学者が招かれます。審議の模様はテープに録音され、証拠は全て公表されます。証人と証拠に関する記録映画を作ります。私たちの目標は、ヴェトナム人民に対しておこなわれたことに関する徹底的な記録を提供することであります。これによって世界の諸国民が未だかつてないほど目覚め、このような悲劇が他処で繰返されるのをよりよく阻止できるようになることが、私たちの念願なのであります。まさしくスペイン内乱の場合と同じく、ヴェトナム戦争は蛮行のリハーサルであります。この法廷の誠実さと信頼性を、隠すべきことを多く持つ者たちの挑戦に傷つけられない、揺ぎなきものにしたいたいと私たちは考えております。ジョンソン大統領、ディーン・ラスク、ロバート・マクナマラ、ヘンリー・カボット・

ロッジ、ウェストモーランド大將、およびかれらの共犯者たちは、かれらにとつてありがたくない広汎な審判と、かれらがとまどいするほど鋭い糾弾を受けることになるでありましょう。」

この訴えには、この汚い戦争をもたらしした者たちに対するラッセルの心底からの憤りと、なんとしてでもこの惨禍を終らせたいと願う激しい気魄が感じられる。かれは、九十五年の生涯を、一貫して人間と人間性の立場に立ち、それらを冒瀆するもの——あらゆる因襲と狂信と残忍性に対する戦いを戦い続けてきた人である。かれの卓越した知性と英知は、「人間と人間性」の最大の危機がヴェトナムに集約されている、と洞察する。「人類の良心に」という訴えの中で、かれはこう言っている。

「世界の世論と世界の行動が、この途方もない残虐行為をやめさせねばなりません。さもないと、「アイヒマン」という名が「人間」の代名詞となるでありましょう。……アイヒマンは墮落した人間性を象徴しています。なにも知らない人々を、なにも考えない人々を、なにごとにも無関心な人々を象徴しています。……二十五年前、ユダヤ人たちがガス室に詰込まれていたとき人々が抱いた気持、それが私たちの現在の気持です。ヴェトナムで犯されている犯

罪に対して、私たちは断乎として、声を大にして、反対せざるにはいられません。」

ヴェトナム問題に対する抗議は、わが国でもさまざまな方法でおこなわれ、新聞は日夜戦況を報道し、特派員は危険を冒して生々しい報告を寄せている。それにもかかわらず、ラッセルの要望するような力強い世論や行動が私たちの中から起らないのはなぜであろうか。平和の幻想が私たちの社会を支配し、ヴェトナムの人々の不幸があたかも私たちの幸福の証であるかのように、それを傍観し、安易な同情以上の関心を寄せようとしないのはなぜであろうか。「道徳的に戦争を断罪する人がいるが、それは、ジョンソン大統領をふくめて、誰でもがしていることだ。」と、昨年来日したサルトルは私たちに言ったが、私たちは、道徳的にすら、果して戦争を断罪していると言えるだろうか。この戦争を対岸の火事のごとく傍観し、戦争映画を観るようにそれを楽しんでいるのではないか、と問われて、私たちは果して自信をもって「否」と言えるであろうか。

このように考えてくると、私たちは、私たちの人間性が、自分をとりまくごく狭い範囲ともあれ、広く人間社会との連帯性という点では、いちじるしく損われていることを反省せずにはいられない。これは否定し難い事実である。サン・テクジュペリのいう「自分とは直接に関係がな

いように思われる不幸に対して「忸怩たる気持」が、今日ほど稀薄な時代は未だかつて無かったのではあるまいか。

これにはいろんな原因が考えられるが、ここでは、ある意味でこの傾向に拍車をかけているとも言えるわが国の新聞の姿勢に注目したい。たしかに新聞は、ヴェトナムの刻々の情勢を伝え、その悲惨な現実について特集記事を提供し、この戦争の一日も早い終結を要望する。それでいて、多くの読者の眼には、ヴェトナムの問題が単なる「出来事」としてしか映らないのはなぜであるか。新聞人に言わせれば、それは国民一般の意識の低さであり、広く蔓延した「平和と繁栄」の幻想であるかも知れない。しかし、その意識を啓発し、幻想に対して警鐘を打ち鳴らすのが新聞の本来の使命である。そして、それを果すために新聞に要求されるものは、今日のごとき形式的な中立主義ではなく、最も純粹な意味での客観性であり、関係のある全ての事実を追究し報道する公正さと勇氣である。かれら自身が標榜するこの客観的な公正さこそ今日の新聞に欠けているものと言わざるを得ない。なぜなら、「アメリカ軍の後方基地としてわが国の果している役割の実態はどのようなものであるか」、「政府が極力過小評価しようとするヴェトナム特需はわが国の経済の支柱ではないのか、また、それによって、言いかえればヴェトナム人民の犠牲において、利益を追求しているのは誰であるか」、「朝鮮戦争のときと

同様に、アメリカ軍用のナバーム弾その他がわが国で製造されているのではないか」、「軍需産業へ続々と送り込まれる自衛隊の退職幹部の人数と役割はどのようなものであるか」——かれらの組織を以てすれば容易に究明できるはずのこれらの問題を、新聞はせいぜい記事の中に深く埋め込んでほのめかすだけで、それを徹底的に追究して国民の批判に訴えようとはしないからだ。

新聞は、政治家たちと同様、アメリカに対して必要な抗議を怠ってはいない、と言うかも知れない。しかし、「：は遺憾である」式の、相手が反論の必要すら感じないようなあいまいな抗議に、果して何の意味があるだろうか。それは結局、一種の馴れ合いでしかない。それは、「私たちは決してこの戦争を支持しているのではない」という無責任な安堵感を国民に与えることによって、無益というより、むしろ極めて有害である。

私たちが、私たちひとりひとりの良心の問題としてヴェトナム戦争を考えるためには、前にあげたような問いに対する解答をふくめた全ての事実を知ることが必要である。もし、かりに、ヴェトナムの農民や婦女子を「泡立つ肉塊」に変えるナバーム弾が日本人の手で製造されていると私たちが知らされたら、ヴェトナム問題に対する私たちの気持は根本的に変わるにちがいない。それは、私たちの快い同情をそそる悲劇的な叙事詩ではなく、私たちの良心の

呵責を動機として挑戦されるべき、私たち自身の問題となるであろう。私が新聞に期待したのは、このような意味で、私たちの良心を深く抉るような「真実」を、広く、力強く訴えてくれることなのだ。ラジオやテレビが救い難く墮落し、価値ある雑誌や出版物がごく一部の人々の眼にか触れない今日では、新聞は国民一般にとって「真実」への唯一の窓である。それは今こそ大きく開かれねばならない。さもなければ、私たちは眼を開いたままで盲目になり、「何も知らない、何も考えない、何事にも関心を持たない」人間になってしまうであろう。

この稿においてラッセルの訴えを紹介するのは、それが、私たちが無意識に抱いている有害な幻想を粉粹し、私たちの良心を喚起してくれると信ずるからである。そこに感じられるかれの卓越した英知と理性、それらを真に価値あらしめるかれの情熱と勇氣は、今日の世界にとつて限りなく貴重であると言えよう。次にもうひとつ、かれが法廷（かれは病気のためそれに出席できなかった）に送ったメッセージを紹介する。（原文はまだ出版されていないので、雑誌『現代の眼』所載の録音テープからの訳文を借用する）

「戦争犯罪国際法廷がここに召集されたのは、アメリカがヴェトナムで残虐な戦争を続けているからであります。

この戦争の原因は、世界人口の僅か六パーセントを有するに過ぎないアメリカが、世界の天然資源の実に六〇パーセントを支配しているという事実にあります。

この帝国を守るために、アメリカの資本家たちは、アメリカの経済支配への人民の抵抗を粉粹すべく、巨大な軍隊と軍事機構を創設しなければなりません。またアメリカは、全世界から社会革命を除去しようと努力し、その中でいくつかの技術を発達させております。アメリカの支配者たちは、侵略の近代的形態は国内の破壊活動である、と口癖のように申します。しかし、かれらの言う国内の破壊活動とは、被圧民族の献身的で自己犠牲的な指導者が抱く社会的変革への要求にほかならないのであります。

実際には、侵略の近代的形態は、外国勢力の利益を擁護する傀儡政権の樹立なのであります。傀儡政権は、次のような基本的性格を持っております。つまり、かれらは外国投資の現地保証人として機能し、かれら傀儡の売国行為に戦いを挑むような政治的敵対者をすべて粉粹し、さらに社会革命の勢力が手に負えないほど強力になると、かれらは、支配者であるアメリカが、社会革命の鎮圧という、ほかならぬその目的のために自ら創設した巨大な軍事機構を用いるよう、懇願するのであります。ある国々が外国の資本家に従属する腐敗した独裁政治の打倒に成功したとしましょう。そのときアメリカは、莫大な金を投じてCIA

(中央情報局)を操り、アメリカの権力に刃向う人民の政府を買収したり、抹殺したり、クーデターによつて転覆させたりするのです。

この残酷な搾取の代価が一般民衆の苦難と飢餓と疾病——アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の第一の特徴——であることを、アメリカ政府はよく承知しております。これらの諸国の、アメリカによつて任命され保護された社会的諸勢力は、苦難や飢餓や疾病を解決する能力がないだけではありません。かれらの存在こそ、実はこれらの害悪を永続させるものなのであります。貧しい国々から飢餓と疾病を取除く方法は、ただ一つしかありません。それは傀儡政權を打倒し、アメリカの力に立ち向うことのできる革命を起すことなのであります。現在ヴェトナムで起っていることがこれなのです。だからこそアメリカは、あらゆる種類の拷問と殺人実験をおこない、ヴェトナム人民の革命を押しつぶそうとしていたのであります。

アメリカが現在ヴェトナムでおこなっていることは、かつてヒトラーがヨーロッパでおこなったことと全く同じであり、その理由も基本的には全く同じものなのです。アメリカは、ヴェトナムが人類史上におけるひとつの英雄的かつ重要な出来事であるばかりでなく、アメリカの力に対するひとつの危険な徴候であることを認めております。アメリカは、スペインに対するヒトラーと同じやり方で、ヴェ

トナムを考えているのであります。スペイン革命は、他のヨーロッパ諸国に革命の息吹きを吹き込むことができるものでした。そこでナチは、現地のファシストとともにこの革命を押しつぶそうとし、非人道的な武器や大量殺戮の実験的方法をためす試験場としてスペインを利用したのであります。アメリカが現在ヴェトナムでおこなっていることの意義の深刻さは、ここにあるのであります。

ヴェトナムで、アメリカは有毒化学薬品、毒ガス、神経麻痺ガス、細菌兵器、黄燐ナパーム弾や、悪魔的な破裂爆弾を実験しておりますが、これは単にヴェトナムを破壊するためばかりではなく、さらに他の戦争に備えるためでもあるのです。ヴェトナムで実験したガスやナパームを、アメリカ政府はすでにラテン・アメリカ諸国に持ち込んでおります。ペルー、コロンビア、ヴェネズエラ、そしてボリビアで、現在これらの兵器が、土地改革、食糧、および警察による拷問の廃止のために戦っている農民バルチザンに対して使用されているのであります。世界の革命は続き、それに対して世界の反革命は凶暴に立ち向う——これがヴェトナム問題のもつ偉大な意義であります。

これは基本的な教訓であり、この教訓を無視しようとする者は、単に有害な幻想をふりまくだけでなく、他の諸国の人民を、幾世代にもわたって、苦しみと死の犠牲にするものと言えましょう。

侵略という言葉は、軍隊による国境の侵犯という意味で用いられる習慣になっております。しかしこれは、国連や、国際司法裁判所や、ハーグにとって都合のよい、形式的・慣習的意味での侵略に過ぎません。世界市場もまた侵略のひとつの主要な形態なのであって、国際価格は貧しい国々にとって不利な結果をもたらし、富める国々は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国を窮乏化させるために、この国際価格を作り出すのであります。飢餓に苦しむ一、〇〇〇万のインド人は、現在、一種の侵略を経験しています。強国や支配者集団は、国連や国際司法裁判所のよきな機関を創設しましたが、まさしくこれらの国々と支配者集団が、世界の人民を無慈悲に搾取しているのであります。

だからこそ、被圧迫民族の要求と苦悩をこれらの機関に反映することができないし、全世界の被圧迫民族とは全く無関係な種類の侵略しか、現在では侵略と認められていないのです。たしかに、アメリカはヴェトナムに対して武力侵略をおこなっていますが、これは、もうひとつのさらに根本的な意味での侵略が、ヴェトナム人民の革命をひき起した結果にはかなりません。アメリカがヴェトナムに軍隊を投入しているのは、ヴェトナム人民の革命が、搾取国の侵略に挑戦しているからなのであります。

当戦争犯罪国際法廷は、私がここに述べたような方向で

世界の出来事を見る勇氣を、全世界人民に与えるものと私は期待しております。私は、当法廷が今後も存続されることを希望します。そうすれば法廷は、将来必要な時に開廷し、全世界の人々がすべてヴェトナムの例にならうまでは、今後とも避けることができまいであろう戦争犯罪を暴露し、告発することができようであらうでしょう。」

最後に、アメリカの極東政策を中心に第二次大戦後のヴェトナム紛争史を年表風に記し、読者の参考に供したいと思ふ。

一九四五年 九月、ヴェトナム民主共和国独立宣言。ホー・チ・ミン、同国主席に就任。

一九四六年 十二月、ヴェトナムで反仏解放闘争（インドシナ戦争）始まる。同年七月、中国で国府軍と中共軍の戦闘始まる。（アメリカは中国市場への進出を確保するため、二〇〇億ドル以上の援助を蒋介石に与えた）

一九四七年 三月、米・比軍事協定。この頃からアメリカ資本のヴェトナム進出が始まる。

一九四八年 フランスの焼土作戦激化し、九月、ヴェトナム民主共和国はフランスに宣戦布告。

一九四九年 六月、フランス、香港に亡命中のパオ・ダイ帝を推して傀儡政権を樹立、ヴェトナム共和国（南ヴェ

トナム)成立。蒋介石台湾に逃れ、十月、中華人民共和國成立。アメリカの中国封じ込めを目的とする極東戦略始まる。

一九五〇年 二月、アメリカ、バオ・ダイ政権を承認し、軍事経済援助を約す。六月、朝鮮戦争始まり、マッカーサー司令官は急遽日本に警察予備隊を創設。九月、アメリカ軍事使節団ヴェトナムに到着、フランスへの軍事援助を強化し、十二月、バオ・ダイ政権は米・仏と相互防衛協定を結ぶ。

一九五一年 八月、米・フィリピン相互防衛条約調印。九月、日米安全保障条約調印。この年より、ヴェトナムではホー・チ・ミン軍優勢となり解放地区拡大する。

一九五三年 七月、朝鮮休戦協定調印。十月、米韓安全保障条約調印。

一九五四年 五月、デイエンビエンフー陥落。七月、アメリカ、ゴ・ジンジウム傀儡政権を擁立。同じく七月、インドシナ休戦協定(ジュネーヴ協定)調印。(アメリカは「尊重するが拘束されたくない」と調印を拒否。ゴ傀儡政権もそれにならう)九月、ダレスの提唱による東南アジア条約機構成立、南ヴェトナム、ラオス、カンボジアを保護下におくと決議。(加盟国は、タイ、パキスタン、フィリピン、米、英、仏、濠、ニュージージーランド)十二月、米・国府相互防衛条約調印。ここに、中国を三日月

型に包囲するアメリカの戦略体制が完成。

アメリカが調印を拒否したジュネーヴ協定の最終宣言で確認された主要条項は左記の通りである。

。ヴェトナムへの外国の軍隊および軍事要員の導入ならびにすべての種類の兵器および弾薬の搬入を禁止する。

・軍事上の境界線は暫定的なものであり、いかなる意味でも政治的・領土的境界を定めるものと解してはならない。

。南北統一の総選挙は一九五六年七月に行われるものとする。

。ジュネーヴ会議の各参加国は、カンボジア、ラオスおよびヴェトナムと自国との関係において、これら三国の主権、独立、統一および領土保全を尊重し、これら三国の国内問題に対していかなる干渉も行わないことを約束する。

(これを一読すれば、アメリカ政府が調印を拒否した理由は自ら明白である。)

一九五五年 六月、ジュネーヴ協定に基き、北ヴェトナム、南北統一選挙を提案。七月、南ヴェトナム政府、統一選挙を拒否。(選挙を実施すれば、ホー・チ・ミンが大統領に当選確実であった。)十月、南ヴェトナム共

和国樹立を宣言、ゴ・ジン・ジェム、大統領に就任。アメリカ、ゴ政権の全面援助を確約、軍事援助を着々と強化。(以後、ゴ政権による弾圧政策と解放地区に対する報復が始まる。その恐るべき残忍性は、小山内宏『ヴェトナム戦争』—講談社ミリオン・ブックス—を参照されたい。)

一九六〇年 十二月、南ヴェトナム解放民族戦線(通称ヴェトコン)結成、ゴ傀儡政権に対する全面的抵抗運動開始する。

一九六一年 五月、ジョンソン副大統領、南ヴェトナム訪問。六月、アメリカ軍事顧問団、約七〇〇名に達す。十月、テイラー大統領軍事顧問、南ヴェトナム到着、ヴェトコン鎮圧計画作成。十一月、米軍ヘリコプター部隊、南ヴェトナムに進出。アメリカのヴェトナム紛争への直接介入が始まる。

一九六二年 二月、アメリカ兵四、〇〇〇名に達す。(同年末には一万二〇〇〇名に達す。)三月、強制的に農民を収容する戦略村計画開始。九月、テイラー米統合参謀本部長、南ヴェトナム訪問。

一九六三年 六月、サイゴンで、ゴ政権の弾圧に抗議して仏僧が街頭で焼身自殺。八月、軍隊と警察、寺院を占領、弾圧熾烈をきわめる。九月、マクナマラ米国防長官、テイラー統合参謀本部長、南ヴェトナム視察。十一月

ゴ大統領および弟ゴ・ジン・ニュ殺害さる。(ヴェトコンによる暗殺ではなく、ゴ大統領配下の若い將軍たちのクーデターによる。)

一九六四年 (軍事政権をめぐるクーデター相次ぎ、以後南ヴェトナムには権威ある政府は存在せず、ヴェトナム戦争の主導権は名実共にアメリカ軍に移る。)八月、トンキン湾事件起り、ウェストモラーランド大將(七月赴任)のもとに米軍の活動激化する。

一九六五年 二月、米軍機、北ヴェトナムのドンホイを爆撃(北爆開始)。二月、南ヴェトナム韓国軍第一陣到着。

三月、米海兵隊二個大隊、ダナン上陸。サイゴン米軍当局、毒ガス弾使用を確認。六月、ジョンソン大統領、米地上軍の戦闘参加を承認。B52戦略爆撃機グアム島から渡洋爆撃。七月、八月、米第一歩兵師団、米一〇一空兵師団、米第一騎兵師団などの精鋭部隊、南ヴェトナム上陸。十一月、米海軍、原子力空母エンタープライズ号を第七艦隊に配属。十二月、米軍機、ハイフォン北東二二キロのウォンビー火力発電所を爆撃。

一九六六年 一月、米軍兵力約二〇万に達す。ラスク國務長官、南ヴェトナム政府の支援を強調。三月、米軍機、中国国境から二五キロのラオカイ地区爆撃。四月、米國務省「北爆に聖域なし」と言明。十月、ジョンソン大統領、カムラン湾基地を訪問。米艦、北ヴェトナム沿岸

に艦砲射撃開始。十二月、米軍機、ハノイ市街地を爆撃
一九六七年 二月、米軍、北ヴェトナムへ長距離砲撃を開
始。北の河川に機雷を敷設。五月、ハイフォン火力発電
所爆撃。非武装地帯へ進攻。ハノイ中心から一・七キロ
の発電所を爆撃。米軍兵力、約四六万に達す。七月、マ
クナマラ国防長官、南ヴェトナムを視察、兵力増強につ
いて協議。ウエストモーランド大将、二〇万名増強を要
請。